

地域のクリニックと共生する開かれた基幹病院として “地域のメディカルモール”を 目指す「三愛病院」の 新外来棟が始動、増床も認可

「助けられる可能性があれば治療に取り組む。救える命は1人でも助ける」。こう強調するのは医療法人社団・松弘会理事長の済陽輝久(わたようてるひさ)氏である。同会の拠点病院・三愛病院は4月1日、新たな外来棟を開院させ、8月には73床の増床も認可された。地域医療の一翼を担う同病院の役割とは何か。一方で、認知症専門病院「トワーム小江戸病院」でも退院患者が1500名を超えた。済陽氏が目指す医療の姿とは？



わたよう・てるひさ

1975年東邦大学医学部卒業。1985年三愛病院設立。1997年医療法人社団松弘会理事長。1993年腹腔鏡下手術実施(埼玉県初)。2005年人工骨頭置換術(当日立位・歩行可能)発表。

医療法人社団松弘会の沿革

- 1985年 4月 理事長・済陽輝久が三愛病院を設立(52床)
- 1992年 3月 MRI導入
- 1997年 4月 医療法人社団松弘会 三愛病院となる
- 1999年 11月 三愛病院増床(126床)
- 2004年 9月 ガンマナイフセンターオープン
- 2006年 4月 介護老人保健施設「トワーム熊谷」開設
- 2006年 7月 介護老人保健施設「トワーム指扇」開設
- 2008年 6月 認知症専門病院「トワーム小江戸」開院(200床)
- 2010年 12月 ハートホスピタルパートナーズオブジャパンと提携
- 2013年 8月 73床増床認可(126床→199床)



メディカルモール(新外来棟)外観

「早期発見・早期治療にさらに力を入れるための設備。将来は健診センターも開設し、個々の患者さまの生活状況や体質なども考慮したオーダーメイドの検査を行っていききたい」。こう語るのは医療法人社団・松弘会三愛病院理事長の済陽輝久氏。松弘会は1985年4月に埼玉県さいたま市で「三愛病院」を開院して以来、同地区の地域医療の一翼を担ってきたが、本年4月1日、新外来棟を開院。三愛病院は外来13科、一般病床52床、24時間の救急医療体制を敷く総合病院とし、当時から最新の見・治療の導入など、早期発見・治療の為の設備投資は積極的に行ってきた。



メディカルモールのエントランス

2019年にはMRI設置、2020年には県下初のガンマナイフセンターをオープン。直近では昨年富士フイルムの世界初の最新320チャンネル、今年も東芝の最新型3D画像もA Z E社の最新型3D画像対応のワークステーション、フイルップ社製3.0テスラMRIを相次いで導入予定だ。「最新の医療機器や技術を使っ」てスピーディーかつ緻密に治療を進めることが「最善の道」(済陽氏)と云うわけだ。では新たな外来棟を設立した狙いとは何か？ それは地域に開かれた基幹病院として三愛病院が中心となつて地域の医療機関と連携し、「地域のメディカルモール」をつくりたい(同)という済陽氏の思いがあったからだ。新外来棟の1階と2階の受付

には「コンシエルジュ」が常駐し、外来患者の症状に合わせて診療科を案内する。ホテルや高級マンションで耳にするコンシエルジュ。いわゆる案内役だが、三愛病院のコンシエルジュは、現役時代に培ってきた豊富な経験や知識が生かされるのだ。また、従来の西棟を検査棟、今回の新棟を外来棟とし、機能別にすみわけすることで診療体制を合理化し、患者の待ち時間の短縮や動線の確保を進める。



最新鋭320列CT(東芝メディカル)(H25.8月導入)

さらに同病院の特長として挙げられるのが、前述した地域の医療機関との連携。三愛病院では、近隣のクリニック(一般診療所)と連携したネットワークを構築し、画像データが自由に

行き来できるようになっていく。済陽氏は「地域医療が危機的状況にあるのは地域の基幹病院に患者様が集中しているからです。クリニックで治療を受けていたとき、救急病院でこそするべき治療は三愛病院がやる。画像データが自由にやり取りできるのだから患者様は、何度でも同じ検査をする必要がない」と語る。



レーザー光源搭載の
新世代内視鏡システム
(富士フイルムメディカル)
(H24.7月1号機導入)

玉県より認可され、同病院では異なるステップアップを視野に入れている。地域との絆を深めることが病院としてのもう一つの役割」と語る済陽氏。松弘会は入院・外来・重度認知症ケアなどの医療を行う「トワーム小江戸病院」を埼玉県越谷市で運営している。2008年の開院以来、6年目を迎えた同病院の退院者数は約1500名を超える。200床の同病院では100床が認知症専門病床で残りの100床が認知と主に内科系疾患などの合併症病床となっている。特筆すべきは同病院に備わっている最新鋭医療機器だ。

トワーム小江戸病院の夏祭り

「地域との絆を深めることが病院としてのもう一つの役割」と語る済陽氏。松弘会は入院・外来・重度認知症ケアなどの医療を行う「トワーム小江戸病院」を埼玉県越谷市で運営している。2008年の開院以来、6年目を迎えた同病院の退院者数は約1500名を超える。200床の同病院では100床が認知症専門病床で残りの100床が認知と主に内科系疾患などの合併症病床となっている。特筆すべきは同病院に備わっている最新鋭医療機器だ。

日本初のGE社製3.0テスラMRIシステムをいち早く導入。患者に負担を与えず、的確な診断・治療が可能になり、他にもX線装置、マルチスライス64チャンネルCT、超音波診断装置、消化器内視鏡検査機器をはじめ、日本初のSAS(睡眠時無呼吸症候群検査装置)なども完備。薬等の使用を極力避けることで、来院者から「消毒の臭いがしない」との感想が聞かれる。



トワーム小江戸病院前庭で打ち上げられたスターマイン(H25.7月小江戸祭り)

合併症に対する治療が可能だ。そのトワーム小江戸病院が地域の絆を深めるために毎年行っているのが夏祭りだ。今年も7月13日に昔ながらの夏祭りをテーマにした夏祭りを開催した。患者やその家族はもちろん、近隣の住民なども参加する夏祭りには556名が集った。当日は盆踊りや御神輿、城西川越高等学校の生徒による和太鼓や、マクロ解体ショー、セラビー犬とのふれあい会、屋台コーナーを実施。当日夜には同院で独自に打ち上げ花火(スターマイン)650発を打ち上げた。